

岡師を語る

千葉良導

(一)

私は今ここに岡師一代八十年の生涯は、今の吾々に何を遺し何を與へられたか、吾々に貽されし賜ものは何と何とであるかを考へて見たいと思ふ。さて茲に岡師と呼ぶは、われ／＼浄土宗の末徒が六百年の祥忌を迎へんとする了譽聖岡上人の略稱である。古來わが浄土の列祖を記述するに當り、多く略稱を用ひられて居る。安譽虎角は「岡公門葉講此書者、如稻麻竹葦」(頌義序)と云ひ、大玄は「岡師引麟論判一代」(頌義探)と、觀隨、了從は「我宗之有岡祖也、猶天台之有荆溪也」(跋重刻)また鎮流祖傳には「延岡師於横會根之館岡公赴請」と、斯く岡公、岡祖、岡師と略稱してゐるが、就中われ／＼末徒としては、岡公の稱呼は感情的に何かなしに耳障りのやうであり、岡祖と云へば尊嚴味が強くして親しみ氣が薄く、岡師の稱呼には敬慕親愛の氣分感ぜられ何かなしに自然的な感じがする。之れ蓋し聖岡上人の略稱として最も廣く一般的に通用され以て今日に至つて居る譯ではなからうかと思はれる。此の意味に於て私も憚ながら略稱を使用させて頂く事にする。

岡師は常陸國岩瀬の武家名門の出生である諸傳記には後村上天皇興國四年正月二十五日誕生とあるが、攝門は十月

十五日とし諸傳誤謬多し(傳通院誌)と云ひて親父の名に付ても、委しく交渉を重ねて居る。興國四年と云へば北畠親房が

露にぬれ霧にしほれて足引の山わけ衣ほすひまもなし

と詠みて、南朝の爲に崎嶇艱難東奔西走して居られた頃で、恰もその歳には岡師と同國なる常陸小田城に據り東國を經營し興良親王を迎へ、足利の根據を覆さんと謀りしが不利にして關城に走り、關城また陥り海路吉野に歸りし年である。岡師一代八十年の生涯は、南朝後村上、長慶、後龜山、稱光の四朝に互り、足利氏また四代を重ねたが、國內の情勢「此頃都にはやるやるもの、夜討強盜にせ綸旨、召人早馬から騒動(中略)下尅上する成りで者、着つけぬ冠、上の衣持ちも習はぬ笏もちて、内裏まじはり珍らしや」(延元年間記)の京董の口ずさみ状態はなほ相ひ續き、殊に東國常陸にては

此ころ當國にては小田大掾水戸長沼ならびに太田の佐竹近隣、陸奥には岩城相馬白川二本松、下野に那須宇津宮、下總多賀谷等その外大小の諸家、或は南朝方と稱し、或は北京方となり、たがひに威を振り勇を争ひて片時も靜ならず。

岡師は斯かる天下争亂の眞只中に教養せられ苦修研鑽の成果を揚げられし事、諸傳筆を揃えて「通霄孜々、不倦學術、動至忘身命、精修苦鍊有年于茲」と云ひ、また「性相顯密、悉皆陶鍊、孔老詩歌、莫不究通」とある。又その浩瀚なる著書釋述にしても、戰亂中よく困苦缺乏に堪え以て精進努力されたのであつて殊に直牒の如きは

地屬干戈之變、卒然負笈隱于洲之阿彌陀山、石屏苔床、以乾柿之齋食、以不能携帶典籍、所錄始終、凡出于暗記

(中略)不省飢寒、從事筆硯、遺忘居諸、果非護法扶宗徹骨之大士、寧得克之乎。(直牒序)

これ諸傳の等しく傳ふる所、罔師が阿彌陀山の洞穴、石屏苔床の裡、眞の困苦缺乏と戦ひつつ、當時二祖三代正義の濁濁を憤激し、異流義を是正し正義を素直に陳示し、その憲章に盡された必死的の業績、只この一事蹟につけても、今時臨戰體制下に處せる吾等末徒として、大に反省を要すべき貽範であらうと思ふ。

また頌義及見聞併せて三十八卷は對内對外兩面に互る批判論、その内容二祖三代未顯の點に論及し、思想的には所謂「定判」を逸して高次のな展開を示されてあるが、其の著述の事情に就て、大玄は次の如く述べて居る。

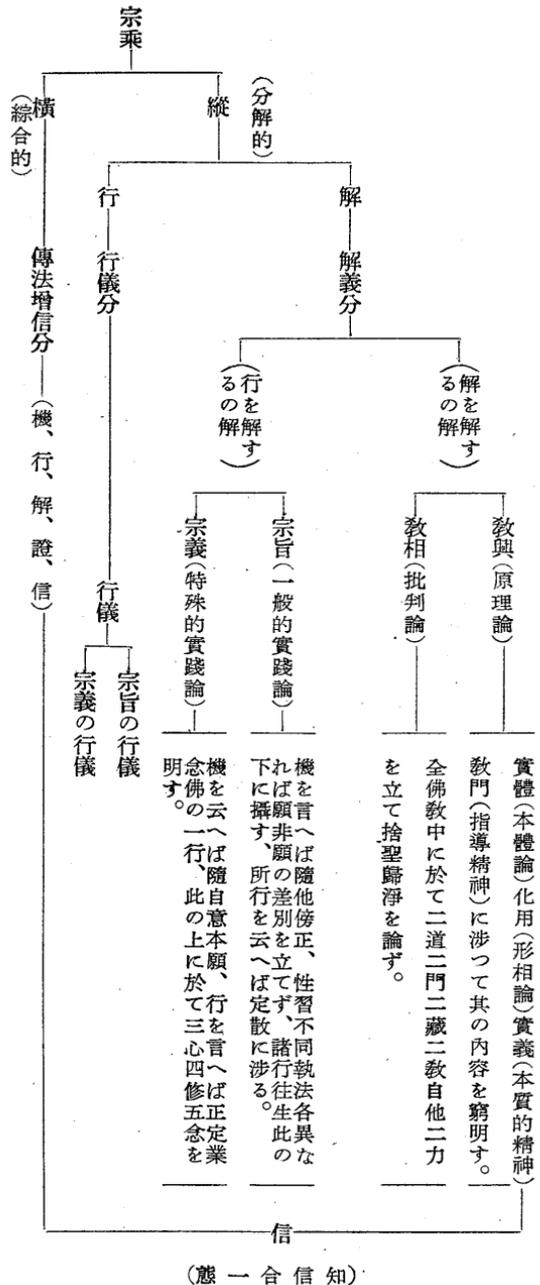
義主(罔師)の出るや世降り俗薄く、浮誇姦曲にして意悃誠なし、攻伐いまだ息まず干戈しばし動く、南北の繼徒と雖も或は旌旗をたて兵革を荷ふ者あり、まゝ聰明才智なる者あれども、多くは利名を徵へて道徳を好まず、實に出離を求むる者千中に一を得がたし。是より先き支那の禪衲、躅を繼て來朝し、五山十刹金碧照耀し、衣服の制、鐘鼓の聲、耳を富しめ目を悦ばしむ、人豁達を喜び海内諍ふて禪に入る。醍醐の上位ありと雖も彼の徒も亦諍ふて禪に入り、おもへらく佛法また禪に過ぐるなしと中略東福の虎關時に乘じて勃興し釋書を撰んで萬世に垂る。其の言に曰く「淨土の一門は傳來の定系なし故に七家の列に非ず、是を寓宗と名く國の附庸の如し」と中略時に於て但だ虎關のみにあらず諸宗の門徒淨宗を下し視ること大抵これに同ず。中略圓宗の人禪を認めて最極と爲し、指方立相は是れ權にして實に非らず、麤淺狹劣にして一も取る所なし。但だ之れ如來方便誘引して、愚癡の男女をして下種結緣せしむ、豈別に西方の在る有らんや、澆風日に扇いで人慢幢を高くす。是を以て他力の頓教時機相應耳に暫く聞くと雖も意全く甘んぜず、以て開化すべきに由なし。是に於て義主憤激痛心す、務めて異執を交り邪輪を擯いて吾が眞門を輝さんと欲す。是に由て事理縱橫の説、蓋し設けずんばあるべからざるなり。

(頌義探
玄鈔)

其の内容に就て探玄鈔には解義の要目、小初後頌、初後性相、唯理唯性、相頌淨土、見生無性、實無輩品、實義無說等の十二項を列擧し論述検討して、鸞綽導空辨然六祖の義にあらず、隨他扶宗の止むを得ざる主張なるものの如く辨じて居る、然かし又よく其の一面を考察せば、之れを單なる隨他の爲の強調なりと手軽く取扱ふべきものにあらずして、所謂導空辨然の思想内容を更に深く掘り下げ検討せば必や之れに到達すべく、所謂「盡精發微」の獨創にして「釋門の重關を闢き祖佛の幽路に通し」以て祖道を憲章せるものと見られ得べく。されば罔師自ら頌義の最終に筆を添へて「方さに今釋淨土二藏頌義三十卷は、是れ淺學を勵ます方便なりと雖も殆んど亦深信を勸むる大猷なり」と、殊に又その思想内容の精神こそ我淨土宗乘が「永く時代に生きゆく」生命の宿す所であつて、吾等末徒の爲の尊き洪範であらねばならぬ。

(二)

また次に罔師以前に於ては、宗乘の學的態形の整備として見るべきものなく、宗祖にしても二祖にしても要するに、在來佛教一般的な解行二門の態形に過ぎなかつたが、罔師に至つて其の整備を見る事が出來た。即ち罔師によらば、解行二門を開きて教興、教相、宗旨、宗義及び行儀とし、而かも其の解行二門皆共に「信」よりの展開であると述べ、そして是等解行の實際的修養の實現として、一面縦に佛祖先哲の教書を細緻検討する、解義の方面と、また「機、行、解、證、信」の所謂五重の綱格を以て、横に之れを綜合し以て信行の増進を見る一面とを設け、以て縦と横、解義と信行、分解的と綜合的との兩面態形に於ける宗乘の學的機構の整備が師の一代指導の上に於て見られ得るのである。



(應一合信知)

此の態形機構の垂示こそ、宗學する吾等末徒に對する「唯一の賜物」と云はねばならぬ。

尙またここに一つの見逃してはならぬ事は、問師が宗乘の原典たる三經一論五部九卷等の上に於て、實體、化用、實義、教門の四義宛然の姿を垂示された事である。此の四義こそ原典を取捌く一の範疇とも名づけ得べく、吾等が原典に對し漫然その用意なき時には其の内容把握に困惑するを常とするのであるが、此の四義の指導に依る時には其の困惑忽ち解消され經意の存する所を知る事が出来る、此の四義範疇の指導こそ、實に吾等學徒に貽し置かれたる至寶で

ある。

(三)

以上問師の業蹟洪範に就て述して來たが今更に日本と云ふ立場に立つて視め直した時には、その數ある業蹟の中で、先づ第一に指を屈するのは、問師の創意たる五重の制定と其の内容の機構組織とである。従つて「知機」を初重とし之れに配する書傳として往生記を採用せられた事を見逃してはならぬ。五重の制定は佛祖の大精神に基く實踐的方面の企劃、確かに隨順佛教、隨順佛意、隨順佛願の「眞佛弟子」たる基礎的な信行訓練、換言せば眞の人間を作り揚げる基礎的な機構組織であり、國家の各層各部に通ずる臣道實踐の基礎的訓練である。五重内容の精神、元より二祖三代の聖意に外ならずと雖も、其の實踐的機構組織の企劃と是れに基く訓練の實施は問師に創まる。問師が往生記を採用して初重に之れを配せし事に就て、古來充分その内意を窮めずして或は作者の眞偽を云云し、或は其の内容の形式に囚はれて之れを輕視し、選擇集を以て之れに代えんと企てし人もあつた。又往生記採用の理由に就ては無題記等に示せる説以外に一步も出ず、何等考慮も拂はれない有様であるが、吾々としてはモット深く注意し考慮を拂ふ必要ありと思はれる。元來作者の眞偽などは學問の上に於ては之れを論じ充分検討するもよいが、宗教そのものの實際的立場、信行訓練の上には眞偽は問題ではない、教書上の文字の指導は、恰も月を指す指頭に過ぎない。指頭の細大醜美に關する問題は學者に任せ置いて、要は其の指差す方向によつて月を視めとり其の光を全身にあびればソレでよいのである。此の意味に於て作者の眞偽問題は暫く預りおく事とする。

さて往生記を採用された内意を窺ふに先立つて、まづ選擇集と往生記との立場を考ふれば、選擇集は其の題號に示された如く、選擇本願念佛の意義を明徴にし、願意に順する生活實踐を指導されたものであり、往生記は其の選擇本願念佛の佛意を機の事實の上に示して、吾等をして其の機になれかしとの指導である、兩者その歸結たる南無阿彌陀佛の實踐化に至つては相一致して居るが、往生記の如く是れを機の事實の上に示すことは理解の煩鎖をからずして端的に領納出来るのである。宗教の要諦は之れを腦裡の理解に留めずして、其の實踐實動の顯現にある、此の意味に於て往生記に依りて、機の事實の上に宗義を知り機の實際事實の上に彌陀の願意を呑み込むの徑捷に如くはなしである。阇師が往生記を採用せられし意また此等の點に存せし事と思はれる。

現時臨戰體制下にある吾々が國策に添ふ生活を爲すべき事、もとより論ずるまでもない、然かし國民各層を通したる實際的事實相の現状に於ては、單に其の理解だけに留まらずして其の實踐化の實現を見ること相當困難な問題である。此の難題に當面する時、「知機」の垂示による指導こそ、實に其の難題に對應する方途であり、拔本塞源的な解決の鍵たるのである。是れ阇師が現代に對處せる吾等に貽されたる尊き贈物であらねばならぬ。

茲に吾等は阇師六百年祥忌を迎ふるに當り其の業績を追想し以て報恩感謝の意を挺ける次第である。

